

曹洞三位の研究（一）

安藤 嘉則

Study of the 'Soto-san'i'(the three stages in Soto Zen practice)

Yoshinori ANDO

一、はじめに

中国禅宗史においては、洞山良价・曹山本寂以来、徧・正を基本概念とする曹洞五位が洞上の家風として認められていたのは周知の如くであり、日本曹洞宗でも道元禅師によって五位説に対する否定的な言説がなされていながらも、中世室町期には再びこの曹洞五位への参究がなされ、古則拈提等における有効な手段として援用されるに至っている。そしてこれまで南英謙宗をはじめ、中世から近世にかけて多くの洞門僧によって、この五位説について研究され、今日においても多くの五位研究が報告され、一分野を形成せしめている。

しかるに今回ここに取り上げる「曹洞三位」とは、自己・智不到・那時の三位から構成されるもので、前述の曹洞五位とは全く別の概念

である。これは特に室町後期から近世初頭にかけての曹洞宗の典籍、とりわけ、門参や切紙、あるいは語録抄や代語抄などの典籍において見い出され、公案拈提の一つの手段としてしばしば依用されているものである。しかしながらこの曹洞三位については、前述の曹洞五位に対する諸研究・諸成果などとは対照的に、これまで曹洞宗の研究史において特に中心的なテーマとして取り扱われることはほとんどなかったようである。¹⁾ こうした事実は、曹洞三位が道元禅師の宗風と距離を置く中世洞門の公案禅を特徴づけるものであり、まさにこの点が江戸宗学以来ほとんど顧みられなかった所以であろう。

ところでこの曹洞三位の自己・智不到・那時は、後述するように、個々の公案解釈に適用されるばかりではなく、中世曹洞宗における公案分類、もしくは公案体系を基礎づける役割を果たし、さらにはこの

三位の段階をより細分化した入室参禅の修行体系の基本的枠組みともなるものであり、こうしたことから、今日三位に関するさまざまな文献が、洞門抄物といわれる典籍群の中に数多く残されているのである。

そこで本稿は、まず、こうした三位に関する文献について紹介し、内容的整理を試みるものである。

二、三位の文献について

そこでまず、三位文献の種々相について、概略的に管見しよう。今ここで、語録抄に見られる個々の古則古語に対する個別的な三位の概念の適用例をひとまず除いて、いわゆる三位文献として残されている多くの文献の成立を考察するならば、これらは基本的には中世洞門僧の叢林における入室参禅の修行に基づいたものである。そしてこれを当時の修行形態によって、分類するならば本参と夜参の二系統に分かれ、この二つの修行形態に相応した二類型の典籍を中世洞門典籍中に数多く見出すことができるのである。

無論「本参」という概念は、従来は「門参」と同じ枠組みとして、夜参やその他の公案修行をも含めた概念としてとらえられており、門参類全体から見たとき、夜参を本参と対比的・等価的にみなすことは慎重でなければならぬであろう。ただこの三位文献に限っているならば、これらはしばしば「・・派本参」と「・・派夜参」として対比的に使用され、また夜参の修行を記した典籍について、これを本参として記述することも、ほとんど見い出せないようである。またその三位商量の内容も本参と夜参とで系統づけられることから、本稿では三位

文献の整理上、本参系と夜参系とに分類した。

しかしながら本参と夜参は中世洞門の修行体系では、必ずしも対等な位置づけにあるのではなく、少なくとも了庵派の場合、接化する修行僧の資格（夜参は久参の上士に限定）や、接化の時期（夜参は夏冬の安居中の二十七夜、すなわち五月二十日―六月一七日と十月二十日―十一月一七日の夜に限定）において、本参と夜参では異なっていたことも注意さるべきであろう。尚、香林寺（神奈川県小田原市）に伝わる大樹派の本参資料（本稿で後述する三位文献のリスト「A」の（20））には「亥四月二日晓参始」「五月初晓天参得禅了也」等の細注が付され、本参が主に晓天において参じられている様子が窺われる。

一方長年寺の三位の本参文献（後述のリスト「A」の（3））では「三箇年随逐之間晝夜入室請益シテ右之次第一々分明参透畢」とあり、ここでは本参の入室商量が日中の参禅ばかりでなく夜半の参禅も含まれていた可能性が示唆される。夜参は前述の如く、原則として夏冬の安居のそれぞれ二七夜で久参の学人に限定されていたのであるが、それ以外の夜半の参禅は本参としての参禅が行われていたのであるか。問題となるところである。

また、この本参と夜参との問題については、円応寺に所蔵される石屋派の三位文献である『靈機宏聖道 三位之次第』において、次のような記述があることが注目される。

了庵派ニハ沙汰ラスルモ此ノ心王ノ事ノ大事ニスル也、畢竟心王ノ用処也、総別夜参ワ本参ノ中ノ言句ヲ以テ集ル者也、能々可見合、又性ノ筋目ノ時ワ空ノ体モナクシテドツコエモ通シタルト見ル也、又智

ト云則ハ、心ト性トノ誦詁ヲ明得スレハ智也、程社、智ハ性ト心トノ間ヲ分テ可心得、又心ト云時ハ体ヲ取出シテドコエモ通シタト見ル也、了庵派ノ夜参筋目モ本参ニ引合テ出ス也、又當門下ノ古則モ句ニ合テ何レモ見ニチツトモ相違ヌ也、却来ワ本参ノ中ニ儒佛道ノ三教一致ノ根本一ツデアルニ、何トテ凡ト別チ聖ト分テハアルゾト云処ニマツカウ分テコソ悟ト云事ハ走ズレト云処カ却来ノ心、又通処ハ一紙破却ノ上テ可見合也、又尽ノ上ノ不尽ト云ハ世間ノ空ハ空ニシテ無也、佛法ノ空ハ空ニシテ真也、空ナレ共真ト走ハ不尽也、取句ヲ以テ自餘ワ可心得者也

この『靈機宏聖道 三位之次第』なる石屋派の三位文献は、内容的に見るならば夜参の修行を記述した典籍（夜参系）と考えられるが、ここでは本参と夜参とが内容的に関連づけられて修行されていたことが窺えるであろう。

さて、この本参と夜参の修行体系によって成立した三位文献の中、本稿では特に本参系のものについて、資料の整理、ならびに若干の内容的考察を以下に加えることとし、夜参の三位文献については別の機会に論ずることとしたい。

そこで本参によって成立したと見られる三位文献について、その叙述形態の上で検討するならば、（一）師資による問答体、ないしは代語形式（師が代って答える）、（二）注解として論述される形式、の二つに基本的には分類されるのであるが、（一）（二）の両者が同一文献に混在している場合や、また目録（三位の修行のテーマ）のみを記したものとがあり、こうした叙述形態による三位の本参（以下、三位文献

と略）文献を分類することは必ずしも適切ではない。

そこで筆者は、内容的、あるいは形態的な観点から見て、およそ次のように三位文献を四つの典籍群に分類し、その整理を試みてみることにしたい。その四分類とは左記の如くである。

〔A〕三位の修行に関して、室内における師家と学人の問答・商量を書き留め、伝授した文献

〔B〕三位の修行の目録のみを記した文献

〔C〕古則公案を三位の修行の各段階に当てはめて配置した文献

〔D〕三位について概説した文献

以下においてこれらの四種類の三位文献について、具体的に検討してみたい。

三、三位の修行を密伝する文献について

まず〔A〕の場合は、師資による問答体（代語形式の場合もある）を基本構造とするものである。すなわち「師云……」、「学云……」（代……）の形式から成っていて、師による謬語と学人による答話、あるいは師家自身が学人に代わって答える代語などによって室内の参禅のありようを密伝したものである。また答話の後に「心ハ……」、「心得ハ……」とあって、商量に関してそれぞれ注解が付される場合も多く見い出せる。

【資料Ⅰ】

△死活當頭ヲ、○学、師ノ胸ヲトラエテ一句云へくト云テ、師ヲ躍倒ス、

○処ヲ、師ヲキセヲツテ学ノ胸ヲ取テソコデ云へ、○学、犬ノ糞ノ云イコトガアラウズ、

○師云、ソコニ徹シタ節ニハ証拠ヲ、○爰ワ足土ノ見羊也○学、拂袖シテ歸ル、

心得ハ、何ン共云タラウニハ死渡リ活ニ渡タゴトヨ、

○師云、忘ノ休ミ派ヲ、始メワミナ忘想タゾ、ソノ塵勞忘想ヲクツト休メデワ○学、師ノ前ニ只忘然トシテ坐ス、

○師云、智寂ヲ、○代、洞然明白、

○師云、ドレガ寂タゾ、○代、何ンニモ無イト見ルハ外道見在ルヲヲシナヲシテ佛智ト弄シテ走、

△師云、自己ノ点処ヲ、○見自如冤家、

○師云、句ヲ、○代、超々空劫留不留、

○師云、其ノ句ノ説破ヲ、○代、豈与塵機作繫留、

○師云、自己目前一致ヲ、○代、自己徹底ヤウ尽シタニ依テ無心ノ目前ト一致ニナツテ走、

○師云、句ヲ、○代、仰面シテ云、十方虚空低頭シテ只是十方虚空、

○師云、何ントシタガ自己、何ントシタガ目前タゾ、○代、久遠ガ目前、今時ガ自己デ走、

○師云、自己ノ淵源ヲ、○代、山虛風落石一門、

○師云、自己眞照淵源ヲ、代、大口忘然、

○師云、著語ヲ、代、深固幽遠無人能到、

○師云、何ントシタガ幽遠ノ地タゾ、代、云クラウテモクラウテ走、

○師云、ソコニハ難シタル人ガ居タゾ、○代、無人ガヨク居テ走、

○師云、獨在ノ主君ヲ、○代、師ノ前ニ至テウソ笛ヲ吹ク、

○師云、智不到ヲ、○代、大用現前不存軌則、

○師云、其ノ句ヲ説破セヨ、○大用ノ時軌則存シ走ヌ、

○師云、亦如何、代、月不知明月秋、

○師云、智不到ノ誰ソヲ、○代、笑入芳塵遊乱満、

○師云、智不到ノ点処ヲ、○代云、揚開金鎖看裡頭一異、

○師云、陰々タル處ヲ、○代云、暗ウテモ暗ウ走、

○師云、風光ヲ、代、末黒ニシテウカガワレヌガ黒光デ走、

○師云、今時ニ至タガ何ントテ本自異デワアルゾ、○代、今時ニアツタガ本自異デ走、

○師云、曹洞宗デハドコ呈ノ在處タゾ、○代、夜半正當デ走、

○師云、句ヲ、○代、宮満沈々夜色深、

○師云、夜色深イ處ヲ、○代、心王ノ都ノ卒度モ傾ヌ処デ走、

○師云、其ノ主ニ通シヤウヲ、○代云、師ノ袖ヲ取テシタト三度引也、

○師云、至到ノ諦訛ヲ一句ニ、代、経尽シテ至ルワ至、其俟到ルヲ到デ走、

○師云、双對ヲ、○学、師ニ對シテ片時計居ル、

○師云、其ニ句ヲ、○類云ニ虎下獸不入蹄ヲ、

○師云、那時三人ヲ、○代、通身無影像、

○師云、其ノ句ノ説破ヲ、○代、通身無デ走、

○師云、無位真人ヲ、○代、伊無国土、

○師云、本来人ヲ、代、十二時中出息入息、

○師云、那邊透過ヲ、○代、師ノ前ニ至テ悠々トシテ坐シテ歸ル也、

○師云、句ヲ、○代、学、師ヲウシロニシテ云、王不存王位、

○師云、三皇ノ化ニ無跡ト云タゾ、化シヤウヲ、○代、徹底ノ時化ヲ
知り走ヌ、

○師云、透過那迦出身有路、出身シヤウ、○代、眼空四海悠縦横、

○師云、却来ヲ、代、何處春山花不紅、

心ハトツコモ此人ノ花路デサ、エタゾ、

○師云、是何物ゾ、○代云、豈是伊留一色、

○師云、伊ガ声ヲ、○代、南山歌嘯北山吟、

○師云、的々相承之家ナ呈ニ猶ヲモ子細ニ、○代、江村片雨外野寺夕
陽邊、

○師云、句ヲ説破セヨ、○代、ドツコモ正位ナラヌ処ハ走ヌ、三拝畢
了畢

源頭ヨリ 長年寺藏『一州派秘書』一〇一—一四丁、〔A〕—(4)

このように自己・智不到・那時の三位をさらに「轉(点) 処」「不轉(点) 処」などをはじめとする、細かな項目設定をなし、これに「著語ヲ」「句ヲ」「承當ヲ」「句ヲ説破セヨ」といった挿語によって、学人の境涯を点検していく室内の修行のありかたを窺い知ることができ
るのであろう。こうした「A」のような師資の室内商量の問答を伝える
三位文献は、室町後期から近世初頭にかけて曹洞宗各派に広く伝承さ
れ、それらは本稿末に付した資料A・Bに示した如く、ほぼ共通の内
容を示しており、洞門抄物類の門参資料の中で一分野を形成している
のである。そこで「A」の分類に相当する文献を以下に示そう。

三位文献「A」のリスト

(1) 長年寺藏、『龍瑞記』一〇丁表—一四表に所収される三位の本参、
この『龍瑞記』については、金田弘『洞門抄物と国語研究』三三
六頁—三三七頁に解題され、また『宗宝目録』五六の長年寺の典
籍一六として解題されている。

(2) 長年寺藏、『一州派本参之目録』、『洞門抄物と国語研究』の資料
編『円相門参・上々之参得・門参(六種)・大中寺本参』の二四頁
—四七頁に影印収録。奥書は「六年之辛勞了畢之有判 長年中興
天産連大和尚 附与 祖祝長老」とある。本書については、金田
弘『洞門抄物と国語研究』三〇六頁にも解題され、また『宗宝目
録』五六の長年寺の典籍一七として解題されている。

(3) 長年寺藏、『一州派本参』(仮題)、『洞門抄物と国語研究』(金田
弘著)の資料編である『円相門参・上々之参得・門参(六種)・大
中寺本参』の巻の一〇頁—一五頁に収録された本参。奥書には「于
時天正七丁卯臘八日 清林座元府与之 天産受連 花押」とある。
金田氏の前掲書三〇五頁に解題がある。

(4) 長年寺藏、『一州派本参』(仮題)、『一州派秘書』上巻の十丁表
—十四丁裏にあり、「△死活當頭ヲ」で始まる本参。この『一州派
秘書』については金田氏の前掲書二七六頁にも詳細に解題され、
さらに『宗宝目録』五六の長年寺の典籍二〇として解題されてい
る。尚、次の(5)の典籍についても同様である。

(5) 長年寺藏、『一州派本参』(仮題)、『一州派秘書』上巻の十四丁
裏—二〇丁裏にあり、「△佛性智相様ヲ」で始まる本参。奥書に「此

之参者総領二計也由也 住長年智堂 花押 授与 嶺雲長老」とある。

(6) 長年寺藏、「一州派本参」(仮題)、『一州派秘書』上巻の二二丁表―二二丁表にあつて「換骨脱胎ヲ」から始まる本参。奥書は「是者傳後之本参、畢竟撈方肝要也、當門徒久参ト云ワ爰デ心得ル―后扣也 智堂叟 花押 付授 嶺雲老畢」

(7) 佛光寺藏、「双林寺代々の傳之三位一透秘事」、三重県北牟婁郡の佛光寺に所蔵される一州派本参(仮題 一冊)の一丁表―十一丁表に所収される一番目の本参。奥書に「于時寛文六午年十月廿四日良辰 前永平常光二世風國大純老納 花押 附与 順後老」とある。

(8) 佛光寺藏、「双林寺代々の本参秘事」、同寺に所蔵される一州派本参(一冊)の十七丁表―二〇丁裏に所収される第三番目の本参。奥書に「于時寛文六丙午年十月吉辰 前永平常光二世風國大純老納 花押 附与 順後老」とある。

(9) 佛光寺藏、「快庵一州兩派之三位一透双林寺代々の嫡傳之本参」、同寺に所蔵される一州派本参(一冊)の二十一丁表―二五丁表に所収される第四番目の本参。奥書に「于時寛文六丙午年十月吉辰 前永平常光二世風國大純老納 花押 附与 順後老」とある。

(10) 佛光寺藏、「梅室和尚以来嫡傳本参」、同寺に所蔵される一州派本参(一冊)の五五丁表―七二丁表に所収される第十番目の秘参。
(11) 佛光寺藏、同寺に所蔵される一州派本参(一冊)の一〇五丁表―一一一丁表に所収され、「△妄智叙三関於」で始まる本参。奥書

に「清泉寺草端葉和尚ヨリ照月達和尚、夫ヨリ全吉和尚、夫ヨリ大龍和尚、夫ヨリ大順、夫ヨリ到順後 于時寛文六丙午年霜月十一日吉辰 前永平常光中興風國大純老納 花押 附 順後老」とある。

(12) 龍泰寺藏、『補陀寺本参』の冒頭に所収される三位の本参(「死活上之一句」から始まる)

(13) 大中寺藏、『太平山大中禪寺嫡傳透本参』(内題)、『洞門抄物と国語研究』の資料編である『円相門参・上々之参得・門参(六種)・大中寺本参』の巻の二一九頁―三二四頁に「大中寺藏本参」として収録された門参。奥書には「歳次寛永一二乙亥三月廿七日 前永平大中一三代 天南 花押 傳附 長子壹人 畢筋」とある。
金田氏の前掲書三〇四―三〇五頁に解題がある。

(14) 長興寺藏、「三位透之参」『上々之参得』に所収された「不思議不思惡」で始まる参。^{*}この「上々之参得」は『洞門抄物と国語研究』の資料編『円相門参・上々之参得・門参(六種)・大中寺本参』の巻に収録され、この参はその一九五頁―二〇四頁に相当する。
末尾に「當門戸トデノ位ノ数五十一位也、密山派一透ノ参禪也 首座教如何見佛法ノ大意ト問シメタソ、処ヲ丁々」とあり、密山派からの伝参であることがわかる。この「上々之参得」については金田氏による解題が前掲書二九一頁にある。

(15) 顯聖寺藏、「當一派本参目錄之次第」、『快庵派默室和尚秘訣』に所収、本文二丁表―九丁裏の部分が、三位修行に関する個所であり、その後は独則の参となっている。

(16) 顯聖寺藏、「顯聖寺默室言大和尚 三位本参之次第」、「快庵派默室和尚秘訣」に所収、「師云、香嚴樹上ヲ」から始まる。末尾には「寛永四年丁卯九月吉日 保寧山主梵昌 花押 付与 源泰禅師」とある。

(17) 顯聖寺藏、「快庵派三位本参(仮題)」(内題なし)、『快庵派默室和尚秘訣』に所収され、「黄檗六十棒」から始まる門参。末尾には「曹洞三位是也、此ノ三位ヲ問ヘバ則チ知識也、不可疑者也 快庵派大中寺之秘訣是也 源泰 花押」とある。

(18) 顯聖寺藏、「顯聖寺默室和尚 佛性智之三位」、「宗門秘録面蔵」に所収、「智寂ヲ」から始まる。末尾には「寛永四年丁卯霜月吉日 保寧山主梵昌 花押 付与 源泰首座」とある。

(19) 顯聖寺藏、「換骨奪体之妙」、「宗門秘録面蔵」に所収、「趙州古佛」から始まる。奥書には「顯聖寺默室派之秘参也 默室和尚ヨリ梵昌和尚 今水原太」とある。

(20) 香林寺藏、「大樹派透参」、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍五「大樹派門参」として解題される。奥書に「子正月十日ノ曉参的了也、九拜、、、、門派增輝萬歳、萬歳 沙門龍徹敬白」とあり、香林寺七世鳳山龍徹(天正一〇年寂)によつて参得された門参。なお本書は三位の修行の時期を細注に明示しており(「亥四月二日曉参始」等)、当時の参禅の様子を窺い知るに貴重な資料である。

(21) 香林寺藏、「安叟派門参」(仮題)、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍七として解題される。奥書によると慶長一五年(一六一〇)

に香林寺九世理琴文察が十世によつて参得された門参。

(22) 香林寺藏、「安叟派嫡家之本参之次第」、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍一五として解題される。奥書には、「海蔵寺一三代比丘文苗叟 花押」とある。

(23) 香林寺藏、「安叟派本参之目録」、「宗宝調査委員会調査目録及び解題」四六(『曹洞宗報』)の香林寺の典籍三八として解題されているもの。「覚翁宗本 花押」の奥書あり。師資の問答、注解も記す。

(24) 香林寺藏、「大樹派本参之目録」、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍四〇として解題される。奥書に、理琴文察(香林寺九世)・独州長尊(同十世)より伝附したものを、寛文九年(一六六九)に同十三世の大休義泉が喚虎首座(同十五世)に附与したもの。

(25) 香林寺藏、「大樹派本参之目録」、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍四二として解題される。奥書よりみるに、前出の香林寺典籍四〇とほぼ同じで、理琴・独州より伝附したものであるが、寛文十年(一六七〇)の年号が記され、同十五世の竹巖が見説首座に附与したもの。

(26) 香林寺藏、「安叟派嫡家之本参之次第」、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍四五として解題される。奥書よりみるに、香林寺一二世の覚外が一三世大休に伝授したものを西福寺祖吞に附与したもの。

(27) 香林寺藏、「即庵派上参」(仮題)、「宗宝目録」四六の香林寺の典籍六七として解題される。奥書に「曹溪山法泉寺永傳大和尚御直判也 即庵派上参 他見アル可ラズ、可銘心肝、莫思疎 即端

在判」とあり、即庵派の門参であることが知られる。問答・注解あり。

(28) 香林寺藏、『快庵派門参』(仮題)、『宗宝目録』四六の香林寺の典籍六八として解題される典籍に所収される門参の中で、一九丁裏―二六表丁にある門参。問答・注解からなるが、三位の各段階に類則が配されている。

(29) 叡山文庫藏、『曹洞三位秘傳』、一冊、識語に「大成山普門院月江和尚ヨリ如此大事之唱也」

(30) 叡山文庫藏、『宗門密参』、一冊四六丁、内題は「曹洞宗廿七段之目録」、表紙裏に「永平開山在唐秘参」とある。この門参に記される三位の修行体系は、一連の三位修行の体系と異にしており、興味深い資料である。

(31) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、一丁表―三丁裏にある「葉山晩参不点灯」で始まる門参

(32) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、四丁表―八丁表にある「不思議不思議」で始まる門参。奥書に「此参五十一位有一々参了 九拜 天童永平通幻了庵天巽心華一格雲通珊玄碩花押 附与玄碩首座靈重叟」とある。

(33) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、十〇丁裏―十二丁表にある「師云死活當頭ヲ」で始まる門参。

(34) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、十三丁表―十七丁裏にある「死活當頭之一句子ヲ」で始まる門参。奥書に「百廿一位天巽派心華以来傳來今至知存頑也者也、能々参シ畢テ見レバ只二位也、畢竟者一位始中終妙也 前永平最乗青原九代乗頑慈九代通珊太藝和尚 附与今雲谷碩叟者也 珍重 于時寛永十三丙子年正月廿日 他不出者也目出度」

(35) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、十八丁表―二十丁表にある「師云死活當頭ヲ云へ」で始まる門参。奥書に「峨山一枚法語 在仲派秘参也 玉智存格雲存通珊叟」とある。

(36) 松石寺藏、『天巽派 心華派 両派之秘参』(「宗宝目録」四三の松石寺の典籍九として解題)に含まれる門参の中、二十丁表―二一丁表の「師云大休ヲ」で始まる門参。奥書に「天巽心華以来之秘参 通珊和尚ヨリ直傳玄碩九拜」とある。

(37) 岩松院藏、『太源門徒不琢派秘参次第』所収の「生下身分未分ヲ」から始まる門参、最後に「不琢派秘参也」とある。

以上、筆者が現時点で中世洞門文献を管見した限りにおいて作成したリストであるが、これらの文献は先に長年寺の門参に示した三位の修行形態と基本的には共通の内容を有する典籍群であり、了庵派下の一州派・快庵派・安叟派・天巽派を中心とする曹洞各派にこうした三位文献が伝えられていることが理解されるであろう。このうち特に注目されるのが、岩松院に伝わる太源下不琢派の門参にこの三位の修行

の体系が影響を与えていることであろう。これは「當門徒上参ノ透リ也」とされる「生下未分」の本則に関する商量の中であるが、「師云、寂ヲ云エ」「師云、智不到ノ処ヲ」「師云、知不到ノ行李ヲ云ヘ」「那辺透過ヲ」「師云、位裡轉側ヲ」「師云、這裡行李ヲ」といったように、了庵派の三位の修行体系を前提にして師家より謬語がなされているのである。この『太源門徒不琢派秘参次第』なる門参には、古則拈提において例えば「了庵門徒デハ自己ノ醒處ト云也」という記述もみられるように、了庵下への参学が反映されているのであり、こうした派を超えた参禅を通して三位の修行体系が太源派にも及んだのであろう。ところでこうした独特の三位の修行体系の他に、三位の各段階をそれぞれ八種に分けて、室内にて商量する別系統の三位の修行体系も次のようにみられる。

【資料Ⅱ】

○宗門八種之自己、

第一人々具足底ノ自己ヲ、代、師ノ前に至テ馬ニハ馬、牛ニハ牛、人ニハ人、師云、句ヲ、代、吾此靈性渡古渡今無隔、私云、宏智之家風ヲ引可シ、師之家風ハ各ガ靈性ワソレ／＼ニナル也、

○第二異類底ノ自己ヲ、代、（以下答話の部分は省略する）

○第三當頭ノ自己ヲ、代、……………

○第四不犯ノ自己ヲ、代、……………

○第五不轉ノ自己ヲ、代、……………

○第六通達ノ自己ヲ、代、……………

○第七智不到ノ自己ヲ、代、……………

○第八那辺ノ自己ヲ、代、……………
○八種之智不到

○第一人々具足底ノ智不到ヲ、代、……………

○第二異類底ノ智不到ヲ、代、……………

○第三當頭ノ智不到ヲ、代、……………

○第四不犯ノ智不到ヲ、代、……………

○第五不轉ノ智不到ヲ、代、……………

○第六通達ノ智不到ヲ、代、……………

○第七智不到ノ独在ヲ、代、……………

○第八那辺ノ智不到ヲ、代、……………

○八種之那時ヲ

師云、那辺ノ透過ノ路、先ツ那辺ヲ透過シ様ヲ、代、……………

○師云、透過那辺出身ノ路ヲ那辺透過ヲ、代、……………

○師云、紫雲ノ遊羊ヲ、代、……………

○師云、透過那辺出身ノ路ヲ、代、……………

○師云、体得那辺這裡行履ヲ、代、……………

○師云、体得佛向上事、此ニ子語話分在ルヲ、代、……………

○師云、体得佛向上ヲ、迥々ニ差路シ様ヲ、代、……………

○師云、枯木岩前往々差路ニ去ルヲ、代、……………

長年堂中仁在之 鼻モ口モ末ナキ也

長年寺藏『門戸之書籍』

このように「長年堂中」に伝わった三位文献は自己・智不到・那時の三位を八分して室内にて参禅するありかたであり、これは三位文献

全体から見ると、珍しい用例であると思われる。これは前出の三位の修行体系と比べると、那時の箇所においていくつかの共通した項目が見られるものの、自己や智不到については「異類底」「當頭」「不犯」といった別の角度からの範疇が両者に共通して設定されている。また「智不到ノ自己」「那辺ノ自己」といったように、三位の中にさらに三位の概念を導入して細分化されており、これは夜参における九分割の類型にも見られるものである。

四、三位修行の目録文献について

次にこの「A」のような室内の間答を伝える文献と平行して、室内において参すべき課題の目録のみを記した目録形態の典籍「B」の数多く存在する。これは前述資料Ⅰの長年寺の本参の傍線部分に相当する師家の問話に相当する部分となっている。

【資料Ⅲ】

透之参之目録

死活當頭一句 轉凡入聖自己 自己轉処 自己不轉
 自己醒処 自己目前 兩墀滿処 自己目前一致
 自己真照淵源 毫釐一功ノ迷 智不到一句 智不到功位迷
 清白圓明智不到 智不到轉処 智不到不轉 智不到不轉々々
 智不到異弁眼 功位路玄通処 那辺承當 那辺透過
 那辺体得這裡行履 阿難誰勘弁 那時三種勘弁 那時窮極
 位裡轉側 裡頭却来 徧正一致 目前轉側 外頭却来
 那辺退得這裡行李 納僧本分之行履 納僧要活 納僧活要

松石寺藏、後出のリスト「B」(8)
 この「A」と「B」の両者の文献は密接な関係をもっているといえるであろう。例えば香林寺藏「大樹派本参目録」などでも、目録を列挙してから、それぞれの目録に準じて室内の商量が記述されており、「A」と「B」とが混在しているものも多く見いだせるのである。

【資料Ⅳ】

大樹派本参之目録

最初之一句子 死活當頭之一句 轉凡入聖自己
 自己轉処 自己不轉 自己醒処
 自己目前兩墀隔 自己目前一致 自己真照淵源
 毫釐功之迷 智不到一句 智不到功位之迷
 清白圓明智不到 智不到点処 智不到之不轉
 智不到不轉ノ轉 智不到異弁眼 功位路元通処
 那辺承當 那辺透過 那辺体得
 這裡行李 阿難勘弁 那時三主勘弁
 那時窮極 位裡轉側 裡頭却来
 徧正一致 目前轉側 外頭却来
 那辺退得 這裡行履 納僧本分行李
 納僧要活 納僧活要 那時三人
 最初ノ一句子ヲ、学、兩ノ挙ヲアゴノ下ニアテタ背エ倒ル、
 和是ワ生下ノ端的ノモヨウ也
 師云、著語ヲ、父母初生眼悉見三千界
 死活當頭ヲ、代云、平ヲ打テ呵々大笑ス、

師便云、其ノ承當ヲ、学、挙ヲ握テ師家ヲキツキナガラ無多子ノ挙也、
(以下省略) 香林寺蔵、宗宝目録、典籍四〇

この形態は、この他にも「A」(2)の長年寺の「一州派本参之目録」なども同様であり、形の上では「B」の典籍は「A」の典籍の目録部分を独立させたものとなっているが、いずれにしても両者は本参としての三位の修行という同一の修行形態に基づいて密伝された文献として位置づけられるであろう。

さてそこで「B」に相当する文献群は以下のごとくである。

三位文献「B」のリスト

(1) 長年寺蔵、「一州派之本参目録」、『鳳瑞記』の一丁裏にあつて「最初」から始まる目録。ただし類則が部分的に記されているので次の「C」の傾向も帯びるが、一応目録文献として「B」として分類した。尚『鳳瑞記』については、金田弘、前掲書、三三六頁―三七七頁に解題され、「宗宝目録」五六にも長年寺の典籍一六として解題されている。

(2) 長年寺蔵、「一州派本参目録(仮題)」、「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二一として解題される文献の五丁―五丁裏にある本参目録。奥書は「本参大概如是、於処々類則可引合事嗣法人在之」

(3) 長年寺蔵、「一州派本参目録(仮題)」、「雑談之本」の最終丁にある本参目録。冒頭に「天童身心脱落 天正四年丙子七月廿五日参始 三位 竹篋背触 カシラ 大死底 ワキニ」とある。

(4) 長年寺蔵、「一州派本参目録(仮題)」、十丁裏―十二丁表にある本参目録。「南泉棒鉢」から「達磨安心」までの二二三の参の目録。

冒頭に「七代御辛勞之目録之写也」とある。本書は「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二五として解題されている。

(5) 香林寺蔵、「大樹派本参之次第」、「宗宝目録」四六に香林寺の典籍六「本参夜参目録」として解題される門参に所収される。この門参の奥書には「天正八季庚辰初夏廿八日 香林中興現住葉山傳法也 龍哲附与 至今代々付属了畢也」とあり、香林寺六世葉山秀芳が七世鳳山龍徹に附与したもの。

(6) 香林寺蔵、「大州派本参之次第」、「(5)と同様の門参の中に所収される。末尾に「本参目録如是於処々類則可引合 從最乗開山嫡々相承来而到吾、々今付属龍徹傳法不遺一物授畢」とある。

(7) 香林寺蔵、「大樹派本参之次第」、「宗宝目録」四六に香林寺の典籍一〇「大樹派夜参之目録」として解題される門参に所収される。この三位文献は前述(5)の「大樹派本参之次第」と同じであるが、末尾には「于時寛永丙子年 初五日 附与林渚者納畢 香林九世長村 花押」とある。

(8) 松石寺蔵、「透之参之目録」、「宗宝目録」四三の松石寺の典籍八として解題される『天巽慶順大和尚 心華周芳大和尚 両派之秘参』の十七丁表―十七丁裏にある「死活當頭一句」以下の門参。奥書は「前永平龍泉最(乗) 青原中興玉山智存大和尚 格雲守存和尚通珊大藝和尚 直傳玄碩 九拜」(B)(2)と同内容である。これらの典籍の中で注目されるのは、(8)の松石寺の玉山智存大和尚 格雲守存和尚通珊大藝和尚から玄碩に直伝された三位の修行の過程と長年寺に相伝された(2)とを比較してみると、両者は奥書を含

め、ほぼ同一であることが知られる。したがってこれは一州派の三位の修行体系が天巽派のものとして伝授されていたことが知られるのである。

また長年寺七世天産受連が参禅した(4)の文献は、全二二三則の中、最初の四二が三位の修行であり、その後、独則としての公案参究が続けられることになっている。こうしたことから三位の修行の入門的な位置に位置づけられるのであり、これをふまえて個々の公案の参究がなされていたことが推察される。

五、公案を分類・体系化した三位文献について

次に第三の三位文献として、三位をさらに細分化し、その各段階に古則公案、古語、機関などをあてはめた典籍も幾多見い出すことができる。

最初第一

雲門透法身句、首山竹篋、香嚴樹上

佛性智第二

雲門折脚、松源岳大力量人、粟米粒

轉凡入聖第三

須弥山、三頓棒、古德前世罪業

忘智寂三関第四

雲門綱宗偈、劫火洞然、殺人放火

自己目前定第五

韶陽新定機、龐居士不落別処、趙州達道人

自己醒処第六

雲門非思量、至道無難、栢樹子

自己目前兩堀隔第七

六不取、大通智勝佛、白沢図、六祖不汚染

自己目前一致第八

百丈野狐、百丈野鴨子、南岳車話、体露金風

自己轉処第九

雲門紅箕、香林応諾話、睦州担板漢

自己功轉処第十

雲門話墮、雲門餠餅、洞山麻三斤

自己真照淵源第十一 六十棒、廬陵米、広額屠士

毫釐之差

智不到一句子

独在智不到

清白円明之智不到

智不到異弁眼

智不到智具足

智不到智受用

智不到轉処

智不到不点轉處

功位玄通路処

不轉之黒物

那辺承當

佛界魔界

那時位裡双帶

那時位裡点側

偏正一致

那時之主勸弁

外道問佛、法眼修山主問答、佛界魔界

指頭築破、黄檗無師禪、定上座佇立

六祖伝衣、南泉月下払袖、洞山独木橋

船子夾山、徳山入門棒、宏智格外玄機

滌山水牯牛、平常心是道、投子婆子応諾、

南泉有主沙弥

恵超問佛、六祖風幡、本来面目

葉山高沙弥、洗鉢盂、臨濟滅不滅

夾山境、道吾智不到、葉山陞座

南泉智不到、茅鎌子、南泉水牯牛、趙州勘破、

趙州四門

普天匝地、二僧捲簾、宏智向上事、同安家風

同安天人師、護国本来父母、誕生王子

維摩入不二、夾山無賓主、佛向上事、大随亀話、

世尊陞座

壁上掛錢財、金峰砂額、沙門看經

世尊拈華、迦葉刹竿、青原鋤斧子

洞山回互傍参、陰気陽光、宏智落

托鉢下堂、七種菜

幻人真人本来人、

武帝達磨、趙州無、南泉牡丹花、三処相見、

鳥窠布毛、雲門餠餅、護国本来父母、滌山成道、

趙州石橋、楊岐三脚驢兒

那時誰勘弁

他是誰、釈迦弥勒渠是誰、

那邊透過

曹山不變異、独木橋

鐘樓上念讚

劉鉄磨、保福遊山、三界無法

那邊退得這裡行

臨濟殺人放火、清稅孤貧、六外一句

衲僧出格自在

普化鈴鐸、禾山解打鼓、南岳一口吞尽、南泉

佛見法見、打地棒

衲僧本分行履

洛浦新處棒、興化出不出問答

(佐橋法龍『長閑閑話』一七七—一七九頁、参照)

さて以上が曹洞三位を基礎にして成立した公案を整理・分類したものであるが、これは中世洞門における一つの公案体系となつていゝと考へられよう。知られるように、禪門においては、公案修行は主として臨濟禪において修され、白隠禪における五種の公案体系、すなわち(1)法身、(2)機関、(3)言詮、(4)難透、(5)向上が今日にまで大きな影響を有しているが、白隠以前に中世洞門において、こうした公案体系が成立していたことは誠に興味深いものがある。已に臨濟宗では円爾による三種(理到・機関・向上)の公案の分類化がなされていたといわれるが、具体的にどのように公案が配されていたかは、知られていない。

さて、そこで「C」の三位の公案分類・体系を記した文献を以下に示そう。

三位文献「C」のリスト

(1) 長年寺藏、「一州派門参(仮題)」、一冊一二丁、奥書には「一州

派之掃地之目録也、可秘者也 長年住智堂 花押 蜜授嶺雲畢」

とある。金田前掲書二〇六頁に解題され、また「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二〇として解題されている。これは、前に【資料Ⅲ】として紹介した大椿光盛の伝写本である。

(2) 長年寺藏、『一州派秘書』(下巻)、一冊一二丁、「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二〇として解題される文献。奥書には「一州派之掃地之目録也、可秘者也 長年住智堂 花押 蜜授嶺雲畢」とあるが、これは、前に【資料Ⅲ】として紹介した大椿光盛の伝写本と内容は同一の文献である。

(3) 長年寺藏、「一州派本参目録(仮題)」、十丁裏—十二丁表にある三位の目録。奥書に「佛法大統領白山大権現 一州派之参禅目録分以上二百十六則也 三位引古則畢竟七十八則也 可秘、」とある。本書は金田弘、前掲書、三〇七頁に解題され、また「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二一としても解題されている。

(4) 長年寺藏、「曇英一派傳後之秘参」、「一州派秘書」上巻、「宗宝目録」五六の長年寺の典籍二〇として解題される文献)の最初の門参

(5) 佛光寺藏、「伝後之秘参(仮題)」、佛光寺に伝わる一州派門参の四〇丁裏—五三丁裏にある第九番目の門参。奥書に「一州和尚曇英和尚明甫和尚梅室和尚以来嫡々相承到今大純以傳附順後了者也 其参禅有貴裡紙可秘々々 于時寛文六丙午年十月吉辰 前永平常光二世風國大純叟 花押 附与 順後老」とある。これは前の「C」(4)の長年寺藏の門参と同一内容である。

ところで三位文獻における「B」の典籍群の中、(1)―(3)は【資料Ⅲ】に見るように、およそ三位を基本に、さらに「自己轉処」「自己醒処」等のように細かく分化させて室内において点検する公案分類・体系であったのであり、結局は「A」あるいは後述する「B」とほぼ同じ体系であることが注意されるであろう。

また右記のリストの中、長年寺と佛光寺に伝わった(4)と(5)の公案体系は、「最初(六則)」「中六則」「上六則」のように、六則づつを三段階に公案を配するのみであるが、これは自己・智不到・那時に当てはめられうると考えられる。前出の公案体系よりも簡潔な形態であるが、「曇英一派傳後秘参」として重要な意義を有するものであるう。

ところでこうした公案分類、もしくは公案体系ともみなせる文獻の成立について論じるならば、筆者はこうした公案の分類・体系化は、あくまで三位修行の中で成立したと考えるのであり、「B」の文獻でも特に(1)―(3)のような典籍の原型は、三位の修行を具体的に伝える「A」の中に見出されるのである。すなわち「A」の中のいくつかの秘参において、三位修行の各段階で、しばしば師家が学人にそれぞれの三位の段階に対する類則を問うているのであり、そこで公案の位置づけが確認されていたのである。

①韓嶺云、智不到ノ處、拶、更ニ不轉不轉ヲ、代、清波不犯意自異ナリ、心ハ、清波不犯トハ……嶺云、其コエ本則ヲ引テ看ヨ、云、船子夾山デ走、嶺云、其ノ本則ノ爰エ首尾シヤヲ、……

『大中寺本参』大中寺藏(金田影印本二六〇頁)

②嶺云、尽功妙旨一不涉ヲ云ヲ見サシ、代、葉山一生喚高砂殿、師云、類則ヲ引カイ、代、通不犯デ走、同、(影印本二七〇頁)

③不点ノ点処ヲ、代、金鎖捲開シテ是裡到陰々風光本ト自異ナリ、拶ワ、捲開ヲ、代、両手ヲ展開シテ首ベヲ下ル此ノ句ヲ八句ノ時キ退步承當特地新ナリト云処ニ付クル門戸ガアルゾ、……雑談アリ、……

・類ヲ引ケ、透法身句北斗裏藏身デ走、拶ワ合セヨ、北斗裏藏身已機ヲ生ズ、モラストモアリ、心ワ、不点ガ法身地也、点処ソコヲ透リ過ギテ那邊エヲモ向ク心口也、猶ヲモ類ヲ引ケ、代、芦花雪月

香林寺藏門参(宗宝目録、典籍六七)

④智不到ノ処ヲ、百日可嫌、何ントモ云モ知ノ間タゾ、処ト指スワ不智測源當人ノコトヨ、……△恁麼ニ過ル者ノワ誰ソ、代、不智、○甚麼力不知、代、ムナクツテ云也、……△根本ニ當行底ヲ、代、瀉山ワ牛ニ、百丈ワ野狐ニ墮シテ走、拶ワ、異ヲ類ノ諦訛ヲ、代、墮ガ類、脱ガ異デ走、△類則ヲ引ケ、代、道吾智不到デ走、

香林寺藏門参(宗宝目録、典籍六七)

⑤那邊ヲ透過シテ看正有出身路、出身ノ路ヲ、代、鐘楼上ノ種芽、師云、類則ヲ引ケ、代、東山水上行、……師云、其句ニ痛カ在ゾ、代、酒ヲ吞トモ、魚ヲクラウトモ、心ハ酒一又姪姑ト云エバ看經ニナルナリ、師云、類則ヲ、代、葉山看經ノ話デ走、

長年寺「一州派本参目録」(A)(2)

師云、自己目前一致ヲ、代、十方虚空是十方虚空、師云、類則ヲ引ケ、代、見明星悟道デ走、……師云、句ヲ、代、独嘯万風ノ中、爰デ古則ヲ多く引ク、竹篋背触ノ當頭エ六十棒ヲ引ク、

松石寺藏 『兩派之秘参』 一一丁表 (〔A〕 (33))

このように各派の三位修行において、師家が謄所として、古則・古語を類則・類句として問われていたのであり、〔A〕の典籍から次第に〔C〕の典籍のような三位の本参の類則・類句の体系に形成されていった過程を推定することができるのである。その意味で〔B〕の典籍は、〔A〕の典籍群から派生・発展して成立した、三位修行の類則集であるといえるのではあるまいか。したがって、こうした三位の公案体系の典籍も、結局は〔A〕〔B〕の文献同様、室内の本参における商量に端を発するものであつて、文献の成立としては、室内の問答を記した〔A〕や〔B〕の三位文献をふまえた後に形成されたものと考えることができらるであらう。

尚、(4)と(5)の長年寺と佛光寺の門参は、已に言及したように三位を基盤としながらも前者の体系とはすこし異なるものである。すなわち公案を最初六則(萬機休罷誰・乾峰三種病・香巖樹上・瑞岩主人公・馬祖不安・南泉牡丹花)・中六則(道吾智不到・龐居士不侶底・船子夾山・外道問佛・德山吸尽去也・曹洞機)・上六則(世尊拈華・六祖不階級・趙州庭前栢樹子・孤峰不白誰・五祖演他是阿誰・南岳得力句)のように、十八則の公案を三段階に六則ずつあてはめたものである。それぞれの奥書にみるように、長年寺のものは光紹智堂(永平寺三〇世)から月寒嶺雲(双林寺十九世)への伝授であり、また佛光寺の方は曇英慧応の法嗣明甫文察(宮城円通院二世)より梅室英芳(同円通院三世、埼玉清泉寺開山)、そして佛光寺二世風國大順に伝わったもので、両者はほぼ同一の内容である。一州派では三位修行による公

案分類とはまた別の公案の体系として伝授されていたのであらう。

六、曹洞三位の概説書について

さてこうした室内における三位の修行に基づいて成立した〔A〕〔B〕〔C〕の典籍群に対して、三位の基本的概念を総合的に解説し論述した文献も見い出せる。三位の文献のほとんどが右記のような実参の場において形成される中で、こうした三位の概説書はほとんど見い出せないだけに貴重な意義を有する文献である。

この〔D〕にあてはまる典籍として「曹洞三位之注却」なる文献を見い出したので以下に紹介したい。この「曹洞三位之注却」は各地に写本が伝えられており、今のところ筆者は次のような七種を見い出している。

- ① 香林寺藏、「傳葉和尚曹洞三位之注脚」、「宗宝目錄」四六の香林寺の典籍六六として解題される『無極派夜参秘訣』の本文第二二丁表一七丁裏に所収。奥書は「花叟派三位ノ秘参 龍天白山守護處 日哲長老ヨリ 磨意 花押」
- ② 大安寺藏、「三位之次第」、快庵派門参『法門集』の本文第二二丁表一四丁裏に所収。
- ③ 大安寺藏、「無極和尚三位注脚」、快庵派門参である『不出戸』の二二丁表一七丁表に所収。奥書は「今接得心口サシヲ以テ養天禅伯ニ付与畢、于時寛永二年正月吉旦 忘九拜」
- ④ 叡山文庫藏、「曹洞宗三位注却」、「宗門密参」に所収。
- ⑤ 松平公益会(高松市)藏、「曹洞三位之注却」、「洞水逆流」(一

冊二八丁)の本文一丁表一六丁表に所収。この『洞水逆流』については『洞門抄物と国語研究』三一〇頁に解題される。

⑥「智不到」、岩松院(長野県小布施町)所蔵『太源門徒不琢派秘参次第』に所収、末尾に「是レハ不琢派独則ノ智不到ト云テ三位ノ外タルヘシ」とあり。智不到の部分のみが記される。

⑦「懸裏底・州裏底・村裏底」、西明寺(愛知県豊川市)蔵の門参(『宗宝調査目録解題』の西明寺典籍三五、本文三六丁)の三〇丁裏一三五丁表に相当。

この「曹洞三位之注却」について、誌面の都合で、六種の写本について智不到の箇所のみを対照表として提示するならば、本論文末の資料Cの如くである。

この資料Cをみると、この六写本には若干の異同は見られるものの、基本的にはほとんど一致する内容・文脈であることが理解されるであろう。

本書の成立について考察するならば、①の香林寺の写本ではその表題から傳葉和尚、すなわち孝顕寺三世の傳葉全迦(快庵派独峰系 永禄六年 一五六三寂)が撰述者とされているのであるが、一方③の大安寺の『不出戸』に所収される写本では、無極慧徹の名が表題に見える。しかしながらこの『曹洞三位之注却』では、大中寺二世の培芝正悦(大永四年 一五二四寂)の代語が二カ所で引用されることから無極撰述説は当然困難となり、ここでは①の香林寺の所伝に従い、孝顕寺の傳葉によって十六世紀中頃に成立したものと考えたい。

ところで右記に示したように、この「曹洞三位注却」という元来は

快庵派の三位解釈であった典籍が、同派内ばかりでなく、洞門各派に流布していったことが窺われるのであり、特に⑥のように、智不到の箇所限定されるものではあるが、「不琢派独則ノ智不到」と記された太源派の門参が、実は快庵派の影響を被っていたことが確認される。また④は天台の浄教坊実俊大僧正による書写、あるいは⑤は医者で菟書家であった福住道祐(寛文・延宝の頃)の書写である。こうした洞門以外の書写は、曹洞三位が洞門の代表的な教説であったことを窺わせるものである。尚、本書に関する内容的検討は別の機会に譲りたい。

七、まとめにかえて

以上の如く三位の文献群を管見した限り、「A」のような室中の商量によって成立したものが基本的な形態であり、特にこれに類則を整理して三位の各段階にあてはめていったのが、「C」のような典籍であったのである。また室内の三位商量の段取り題目だけを列挙し、室内の内容はあくまで秘した典籍が「B」のような文献ではなかったのではなかろうか。要するに「A」「B」「C」の文献群はいずれも本参という室内における参禅に基づいて成立したものであり、これに対し(D)はこうした三位の基本的捉え方について概説・概論として撰述されたものであると考えられる。

この三位の修行は、公案体系の理論として類則として分類もなされていたのであるが、実際の個々の公案に対する参究はこの三位の入室参禅とは別に行われていたようである。既に目録文献の考察においても指摘したように、三位の修行は公案参得の過程では通常最初の方に

位置しており、公案修行の前提となる段階であったことが推測されるのである。

例えば快庵派黙室系（新潟顕聖寺）の門参資料「當一派本参目録之次第」では、三位の修行の目録が列挙された後、「△是ヨリ独則へ行ク也」とあつて、以下、「馬祖不安」等の古則公案を数えていく参学のあり方が示されている。

○當一派本参目録之次第

○亦末后殷懃之透目録之次第トモ 有之

○万機休罷 ○法眼宗自己 ○自己真照之渊源

○自己之知不到 ○自己之轉處 ○智不到之点処

○智不到渊源 ○玄沙三白底 ○葉山高沙弥

○那辺透過 ○船子夾山 ○至本不二

○那辺退得 ○位裡点側 ○宗門破関透関

○先師之関 ○死活當頭

△是ヨリ独則へ行ク也

○馬祖不安 ○世尊滅不滅 ○趙州不衫

○瞎驢滅却 ○古澗寒泉 ○三処相見

○見明星悟道 ○擊竹悟道 ○見桃花悟道

（以下省略）

○以上五十五則也

こうした三位の修行と、これに引き続く古則公案の修行といった形態は、すでに〔B〕（4）の長年寺の典籍に見たのであるが、本参の階梯における三位の修行は、独則としての公案修行の前提段階に位置し

ていたものであり、[※]中世曹洞宗における公案修行の基礎的な参学として重要な意義をもっていたのである。

尚、本稿で紹介した典籍以外にも多くの三位文献が見い出せるであろうが今後新たな資料の蒐集閲覧に努め、検討していきたい。

（1）曹洞三位について、これまで言及されているのは筆者の知る限りでは、佐橋法龍『長国閑話』（昭和五八年）一七二―一七四頁の考察である。

* この「三位透之参」は、飯塚大展氏の「長興寺蔵の本参資料について」

『曹洞宗宗学研究所紀要』第一〇号、一〇七―一三三頁に翻刻されていることを校了前に知り得ることができた。

* * ただし長年寺の〔B〕（3）の目録の場合、三位の修行から独則へ進んでいるが、再び三位の修行に戻っている。

資料A

一州派本参〔A〕(3)	最初 自己ノ不轉 自己ノ淵源 自己ノ轉処 自己目前兩堀ノ隔 自己目前一致 法眼宗ノ自己 妄智寂三関 智不到ノ処 智不到ノ一句 独在ノ智不到 智不到ノ轉処 那边体得這裡行履 那時ノ妙処 位裡点側 那边透過 那边透過看正有出身路 那時三主ノ勘弁 那边退得這裡行李	一州派惣領家残之	死活當頭 自己轉処 自己ノ不轉 自己醒処 自己目前兩堀隔 自己目前一致 妄智寂三関 自己畢竟之轉処 自己真照淵源 毫釐功之差 智不到之一句 智不到功位ノ迷 清白圓明智不到 智不到ノ轉処 智不到之轉処 智不到ノ不轉 智不到不轉之轉 智不到異弁眼 功位路玄ノ通処 那边透過	一州派本参之目錄 〔A〕(2)	佛性智二逢用 妄智寂三関 自己目前一致 自己点処 自己醒処 自己淵源 智不到 独在智不到 異類知不到 智不到異弁眼 智不到点処 智不到之不点 智不到不点ノ点 不点黒物 位裡双對 位裡点側 徧正一致 那時三人 那邊透過 看出身路	龍瑞記〔A〕(1)	入処ノ當頭 自己ノ不轉 自己ノ淵源 自己ノ轉処 自己目前兩堀隔リ 自己目前一致 自己目前共二了々 法眼宗自己 妄智寂三関 智寂 智不到 智不到一句 独在智不到 智不到ノ点処 智不到ノ点 普天 普天黒物 空劫已前自己 那边体得這裡行履 位裡轉側那边妙処 那边透過	七代御辛勞之目錄 〔B〕(4)	不思善不思惡三位 佛性智二逢用 死活當頭 自己ノ不点 自己点処 自己淵源 自己目前一致 自己目前共二了々 妄智寂三関 清白圓明智不到 異弁眼 独在智不到 智不到処路更点々処 不点黒物 空劫已前自己 位裡双對 位裡点側 那边体得這裡行履 那時妙処 那時徹底	長年寺本参目錄 〔C〕(3)	死活當頭 大死底人 轉凡入聖自己 自己点処 自己不轉 自己醒處 自己目前兩堀隔 自己目前一致 自己真照淵源 毫釐差 智不到一句子 智不到功位迷 清白円明智不到 智不到点処 智不到不点 智不到不点 智不到不点 智不到知受用 智不到不点黒物
-------------	---	----------	---	--------------------	--	-----------	--	--------------------	--	-------------------	--

資料B

大樹派本参之次第 〔B〕(7)	死活當頭 大死底 (万機休罷) (竹篋背觸) (香嚴樹上) 活句下承當 自己轉處 自己不轉 自己目前一致 自己涿源
大樹派透参〔A〕(20)	死活當頭 自己ノ醒處 妄ノ休ミハ 寂ノ生シヤウ 智ノ現處 光ノ定メ 法身 自己目前一致 自己ノ点處 自己ノ涿源 智不到 智具足 智不到ノ不点 智ノ受用 智不到ノ点處 清白圓明ノ智不到 那時ノ入りハ 陰々風光 元自異者 那邊与那時ノ諦訛
安叟派嫡家之本参次第 〔A〕(22)	死活當頭 自己ノ醒處 妄ノ休メヤウ 智ノ現處 光ノ定メヤウ 法身 自己目前一致 自己ノ点處 自己ノ涿源 智不到 智具足 智不到異弁眼 不点 智不到ノ点處 清白圓明ノ智不到 那邊エ到ヤウ 那邊途中ノ客 那邊与那時ノ諦訛 位裡ノ双對 二星合觀
大樹派本参之目錄 〔A〕(24)	最初之一句子 死活當頭之一句 轉凡入聖自己 自己轉處 自己不轉 自己醒處 自己目前 自己目前兩墀隔 自己目前一致 自己真照涿源 毫釐功之迷 智不到一句子 智不到功位之迷 清白圓明智不到 智不到点處 智不到之不轉 智不到不轉ノ轉 智不到異弁眼 功位路元通處 那邊承當 那邊透過
松石寺〔C〕(8)	死活當頭一句 轉凡入聖自己 自己轉處 自己不轉 自己醒處 自己目前 兩墀滿處隔處 自己目前一致 自己真照涿源 毫釐功迷 智不到一句 智不到功位迷 清白圓妙智不到 智不到轉處 智不到不轉 智不到不轉々 智不到異弁眼 功位路玄通處 那邊承當 那邊透過
松石寺本参〔A〕(34)	死活當頭之一句子 轉凡入聖 自己勘弁 自己不轉 自己醒處 妄智寂ノ三関 自己目前兩墀隔 自己目前一致 自己ノ点處 自己真照涿源 智不到一句子 独在ノ主 智不到功位ノ迷 自己真照清白圓明 智不到不点 智不到不点ノ点 智不到再勘弁 智不到異弁眼 智不到ノ轉處 那時

位裡点側 退得那邊一履 那時三人 位裡之双對	位裡ノ双對 那時ノ三人 那邊透過 那邊透過看方出身路 那邊退得位裡行李 畢竟	那時ノ勘弁 毫釐ノ差 那時ノ愁意 那邊一履 那邊透過 畢竟曹洞家ノ建立	那邊体得 這裡行李 阿誰勘弁 那時三王勘弁 那時窮極 位裡轉側 裡頭却来 徧正一致 目前轉側 外頭却来 那邊退得 這裡行履 納僧本分行李 納僧要活 納僧活要 那時三人	那邊体得這裡行履 阿誰勘弁 那時三種勘弁 那時究極 裡頭納僧却来 徧正一致 目前轉側 外頭却来 那邊退得這裡行履 納僧本分ノ行李 納僧要活 納僧活要	那邊与那時之誦訛 位裡ノ双對 那邊退得這裡行履 誰勘弁 位裡双對 位裡点側 外頭却来 〔細分化して百二十一位〕
---------------------------------	---	--	--	---	--

傳葉和尚曹洞三位之注脚	無極和尚三位注脚	三位之次第	曹洞宗三位注却	曹洞三位之注却	智不到『太源門徒不琢派秘参次第』所収
香林寺藏本	大安寺藏『不出戸』所収	大安寺藏『法門集』所収	叡山文庫所藏	高松市松平公益会所藏	岩松院所藏
智不到ト云ワ佛祖ノ唱エ 釈迦達磨徳山林才ノ智ヲ 云ウナリ、其ノ佛智祖智 ノ間ダヲバ最初テ掃イ尽 シテノケタゾ、只ダ愚駟 ノ肺肝ニナルナリ、故エ ニ爰ヲ知不到ト云ナリ、 清波不犯意自異也ト云ナ リ、清波ワ佛祖ノ唱エナ リ、一波犯サヌ時キ風波 ワ立ヌゾ、故エニ一色ト 云ナリ、天水ニ映ジ、水 天ニ映ジテ、月キ冷タト 照ラシ、或ワ芦雪相映ジ テ一点ノクモナイ時キ、 智ノサタワ走マイゾ、千 佛万祖モ月ノ白イワナン トシタゾ、雪キノ白イワ	智不到、智ト云ハ、佛祖 ノ唱ヘ丁度打チ入ト喝ス ル悟処悟辺ノコトヨ、其 ノ仏祖ノ智ノ間タラバ、 背触ニ渡ヌ當頭デクツト 掃除シテ只付愚驢ノ肺肝 ニ成ルゾ、故ニ爰ヲ清 波不犯ト云也、波ト云ハ 唱ノコトヨ、犯サヌ時キ 風波ハ立タヌゾ故ニ爰ヲ 一色ト云タゾ、水天ニ子 イシ、天水ニ子イシ、水 天一枚ニ成ツタゾ風モ冷 ニ月モサビシイゾ、雪モ 白ク芦花モ白ク、一点ノ マジリ物無ク、汚染セズ、 ソットモキサタヌゾ、然 ル間ダ、千仏モ万祖モ月	智不到、云、智ト云ハ、 佛祖唱エ、黄頭碧岩徳山 林濟ノ智ヲ云也、其ノ仏 智祖智ノ間ダヲ最初テ尽 ク除却シタニ以テ、只ダ 愚駟ノ肺肝ニ打チナルゾ 呈ニ爰ヲ清波不犯処ト云 タ、清波ト云ハ、佛祖ノ 唱エナリ、犯サヌ時キ風 波ハ立ヌ、風波ト云ハ爰 デハ知ノコトダ、故ニ一 色ノ地ト云也、天水ニエ イジ、水天ニエイジデ、 月モ冷ニ、雪モ白ク、芦 葉モ白ラタエニ一点ノ雲 白ク芦花モ白ク、一点ノ 間絶シタ時キ、智ノ沙汰 ハ走マイ、愁意ト云モ此 境界ニナルヲ云タゾ、爰	智不到ト云ハ、仏ソノ唱 エ、釈迦達磨徳山臨濟ノ 智ヲ云也、仏智祖知ノ間 ヲハ最初テ掃除シテ、只 愚駟ノハタヘニ成也、故 ニ爰ヲ清波不犯ト云也、 清波ハ佛法唱エ也、犯サ ヌ時、波ワ立ヌゾ、故ニ 一色ト云ハ、天水ニ子イ シ、水天ニ子イシテ、月 モ冷ニ、雪モ白ク、芦葦 モ白ラタエニ一点ノマジ リ無、絶シタ時、知ノ沙 汰ハマイ、然間千仏万祖 月ノ白ナワ何ントシタゾ 雪ノ白イソ、何ントシテ 道裡タゾ、風吹イタワ何 トシタ道里タゾ、ト落着	智不到ワ、先ツ智ト云ワ 佛祖ノ唱エ、釈迦達磨徳 山臨濟ノ智ヲ云ナリ、仏 知祖知ノ間ヲバ最初テ尽 掃除シテノケテ、只愚駟 ノ肺肝ニナルナリ、故ニ 清波不犯ト云ナリ、清波 ワ佛祖ノ唱エナリ、犯サ ヌ時風波ワ立ヌゾ、故ニ 一色ト云ナリ、天水粘天 水粘シテ或ハ月冷ニ雪モ 白ク、芦葦モ白ラタエニ 或イハ雪モ白ク、芦葦モ 白タエニシテ一点ノ雲間 無イ時キ、智ノ沙汰ハ走 マイゾ、然ル間ダ、千仏 万祖モ月ノ白イハ何ント シル道裡タゾ、サテ何ゾ デハタシタゾ、時キ落チ	智不到、智ト云ハ佛祖ノ 唱エヲ云タゾ、釈迦達磨 徳山臨才ノ智ヲ云タゾ、 仏祖ノ知ノ間ダヲ最初テ 掃除シテ只ダ愚驢ノ肺肝 ニ成ル也、故エニ爰ヲ清 波不犯ト云也、清波ハ佛 祖ノ唱エ也、不犯時キ風 波ハ起ヌゾ、故ニ一色ト 云ゾ、天水ズニ子イジ、 水ズ天ニ子イジ、月冷ニ 或イハ雪モ白ク、芦葦モ 白タエニシテ一点ノ雲間 無イ時キ、智ノ沙汰ハ走 マイゾ、然ル間ダ、千仏 万祖モ月ノ白イハ何ント シル道裡タゾ、サテ何ゾ デハタシタゾ、時キ落チ

何ントシタゾ、何ン所為 ゾ、々々デ果タシタ時キ 落チ着キワ走マイ、サテ 本智ガ至テ走ゾ、然ル故 エニ夾山ノ点頭三下シタ モ、此ノ肺肝ニスリ付ケ タコトダ、或ワ西湖ノ景 タゾ、其ノ翁キナワ湖景 ヲ知ヌト云モ向ウダ、亦 洞庭七閩ノ景ト云モ向ウ ナリ、亦本朝デハ松嶋小 嶋難波吹上明石浦白良々 高砂廣澤ノ月ニ詠ジテ詠 ジタト知ンガ知不到當人 ナリ、或ワ蘋末休風夜正 半、水天虛碧共秋光、○ 雪月芦花同秋空、○銀河 清無波半夜月橫秋、○樓 閣千家月江湖万里秋、芦 花無異色白鳥下汀洲、ト 云ナリ、曹洞ノ面藏ト云 也、曹洞ノ末后ト云モ爰 ニアルゾ、是（以下略）	ノ白ハサテ何ントモワキ マエス道利タゾ、風ノ冷 カナハ何ントシタ道利タ ゾ、サテ何ン／＼デハテ タゾ、會処承當ハ智ヨ、 サテ何ン／＼デハタシタ 時キ、落着ハ無イゾ、サ テドコニ智ガ到タゾ、夾 山点頭モ、爰ニ淵底シタ コト也、此肌ヲ景ニ比シ テミバ、大唐デハ西湖ノ 景、洞庭七閩景夜涼、大 湖三万ノ夜景ニタトヘタ ゾ、日本デハ、松ツ嶋小 嶋吹キ上ゲ明石ノ浦廣澤 田コトノ月ミラノ松原田 子ノ浦、ト平生説破句面 ニ云ハ、爰ノコトヨ、ト 云テ、浮世ノ景ト為テハ ムダコトヨ、爰ヲ曹洞声 花ノ境ト云タゾ、透句モ 蘋末風休夜正半、水天虛 碧共秋光、雪（以下略）	ヲ秋ノ天ニタウト云ハ 尽シ／＼氣ノウルヲイヲ 云ヲコソガ為メタゾ、然 ル間ダ千仟万祖ノ白ライ ハ何ントシタ道リダゾ、 風ノ冷ナハナントシタ道 リタゾ、此ノ時キモ落チ 付キハ走ヌ、サテドコニ 知ガアツタゾ、夾山点頭 シタモ此ノ肺肝ニスリ付 ケタ呈ニ、爰ヲ太唐デハ 西湖ノ景トモ云イ、本朝 デハ、松嶋小嶋平泉難波 江吹キ上明石ヲ浦白ラ々 廣澤ニ深松バラ小婆捨山、 何ド、云テ説破句面ニ云 也、亦タ芦花ト云モ爰ヲ ノコトダ、心得ガ大事ダ ○師云、知不到ヲ云ワシ 代、不知、ト、師云、夫 レナラバ透リノ句共ヲ云 エ、○代、頻末風休テ夜 正ニ半水天虛（以下略）	セヌゾ、落着等均タゾ、 サテドコニ知カ到タゾ、 故ニ夾山ノ点頭三下シタ モ、肺肝ニスリ付タゾ、 呈ニ爰ノコトヲ大震テワ 西湖ノ景ト云イ、洞庭七 閩景共云也、亦本朝テワ 松嶋小嶋平泉難波タカサ コ吹キ上明石ノ浦ヒロサ ワ田毎ノ月ミラノ松原小 波捨山、ナト、ト云テ、 平生句面ニ云イト方ナ ラヌ景カアルゾ、故ニ透 リノ句多シ、蘋末風休シテ 夜正ニ半也、芦花ニ無異 色、雪月芦花同秋空、亦 銀河清無波、半夜月橫秋 樓閣千「家月、江湖万里 ノ秋、亦月船不犯東西岸 亦銀河淨夜浮靈槎、皆此 ノ句ハ當頭ノ知不到也、 爰ヲ独在共云也、亦宗門 ノ中、墨共云（以下略）	テドコニ知不到テ走ゾ、 故ニ夾山ノ点頭三下シタ モ、此ノ肺肝ニスリ付ケ タゾ、呈ニ爰ヲ太唐デワ 西湖ノ景トモ云イ洞庭七 閩景共云ナリ、亦日本デ ワ松嶋小嶋平泉難波吹上 明石浦シラー廣澤田毎 月三保ノ松原小婆捨テノ 山、ナト々平生説破句面 ニ云ワ是レナリ、然ル間 透リノ句多、蘋末風止夜 正ニ半、水天虛碧共秋光、 雪月芦花同秋空銀河清無 波、半夜月橫秋樓閣千家 月、江湖万里秋芦花無色 下、白鳥汀洲、月船不犯 東西岸、雪月混處秋一色、 清河波靜夜浮靈槎、皆此 ノ句ワ當頭ノ智不到ナリ、 爰ヲ宗門ノ中、墨共云イ 亦ワ曹洞ノ免藏トモ云タ ゾ、ナセーバ（以下略）	付キハ走ヌゾ、サテドコ ニ知カ到テ走カ故エニ夾 山ノ点頭三下シタモ、此 ノ肺肝ニスリ付ケタゾ、 呈ニ爰ノコトヲ太唐デハ 西湖ノ景トモ云也、洞庭 七閩ノ景トモ云タ、亦本 朝デハ、松嶋小嶋平泉、 難和吹上明石ノ浦ヲ、白 浪廣沢田毎ノ月、三保ノ 松原小婆捨山、ナド々平 生ノ説破ニモシタゾ、皆 ナ爰ノコトタゾ、芦花裡 ト云モ爰ノコトデ走、呈 ニ透リノ句モ多ゾ、蘋末 休風夜正央、水天虛壁共 湖万里秋、清河波靜夜浮 靈槎、月船不犯東西岸、 雪月同芦花一色、雪月芦 花同秋空、雪月混處秋一 色、皆ナ此ノ句ハ當頭ノ 知不到テ走、（以下略）
---	---	---	---	---	--